

# 御裳濯

世阿弥作

季は	地は	シテ	後	ツレ	シテ	ワキ	前
五月	伊勢	興玉神		男	老翁	官人	

「山も内外の神詣で。く。二見の浦を尋ねん。

詞 「そもそも是は雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。我此

度伊勢大神宮に参り。内外の宮めぐり殊には内外清淨の信心私なく候。又是より二見の浦石の鏡をも一見せばやと存じ候。

道行

「五十鈴川。清き流れの深緑。く。陰も百枝の松風の。をさまる木々の色までも。神の恵みの御陰ぞと。所からなる心地して。詠め妙なる氣色かな。

く。

詞

「急ぎ候ふ程に。二見の浦に着きて候。是なる小田を見れば。幣帛を立て剩へ渴仰の気色見て候。里人に尋ねばやと存じ候。

シテ、ツレ一声

「露ながら。水かげ草の種取りて。手玉もゆらぐ袂かな。

ツレ 「おり立つ田子の数添ふや。

二人 「御裳濯川の水ならん。

シテサシ

「有難や神の世継は久方の。天の村早稲種取りて。

二人 「今人の世に至るまで。四つの時日は曇りなくて。

千代万代の末かけて。流す田面の早苗取る。田子  
の裳裾の色はえて。袂ゆたかに楽しむなり。

歌  
「種を蒔き。種を納めし神代より。草も木も。我

大君の国なれば。く。何くも同じ神と君。隔

てなき世に住まふ身の。誰か恵みの外ならん。実

にや八島の外までも。波静にて吹く風の。枝を鳴

らさぬ天地の。神の威徳は有難や。く。

ワキ詞

「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。

シテ詞

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ

「是なる小田を見れば。田水は豊かなるに猶川水を  
まかせ入れ。渴仰の氣色見えたり不審にこそ候へ。

シテ

「さん候是は神の御田にて候。又此川は御裳濯川と  
て。田水は豊かなれども神水をまかせ入れ。五十  
の水口に幣帛立て。神徳長久の恵みを仰ぐ政に

て候。

「さて此御裳灌川はいつの代よりの名にて候ふぞ。

シテ「さん候人皇十一代垂仁天皇の皇女。御名は倭姫の

皇子。忝くも御神鏡をいたゞき国々を廻り給ひしに。当国にてはあの二見の浦より。此川路に就いて上り給ひしに。御裳の裾よごれたりしを。此川にて濯ぎ給ひしによつて。御裳灌川とは申すなり。

ツレ「其時田作の翁のありしが。神の御鎮座になるべき

所やあると御尋ねありしに。

シテ「彼翁申すやう。さん候此川上に三十八万歳の間此山を守護し奉る者の候。御道しるべ申さんとて。下つ岩根を敷きて参らすると云へり。されば其時の田作の翁は。今の興玉の神是なり。

ツレ「其時尋ね入り給ひしによつて。山をば神路山といひ。

シテ「川をば神路川と名づけ。

ツレ  
「流れ久しく澄める世の。

二人 「天長地久嘉辰令月の。御影濁らぬ御裳灌川の。神  
徳深き水田なれば。神にまかせて作るなり。

ワキ 「謂を聞けば有難や。さてく今之名にしおふ。其  
御裳裾を濯ぎ給ひし。在所は取り分き何くの程  
ぞ。

シテ 「されば先にも申しゝ如く。御裳灌川と名づけし事。  
取り分き此瀬の辺なれば。神が瀬とこゝを申すな

り。

ワキ 「あら面白や神が瀬とは。神かぜとこそ聞き馴れし  
に。

シテ 「されば常には神風や。伊勢と申すも神の誓ひ。

ツレ 「又此川には神が瀬とて。神の渡瀬のある故に。神  
路川とも申すなり。

シテ 「然れば歌人の。

二人 「言の葉にも。

地

「山の辺の。御井をみがへり神が瀬の。く。伊勢

の乙女等あひ見つるかなとよみしも。此倭姫の古  
へを。よみ奉る心なり。千早振る。神路の山の村  
雨は。種を蒔くなる神の代の。久しき湿ひに。天  
の小稻の天が下。広き恵みに逢ふ事も。唯神徳に  
あらずや。有難の神の誓ひやな。あら有難の誓ひ  
や。

ワキ詞

「猶々神慮残さず御物語り候へ。

地クリ

「忝なの御事や。我等迷ひの凡夫として。神徳王事  
の恵みを受くる。仰ぎても猶あまりあり。

シテサシ  
「それ人は天下の神物なり。かるが故に正直を以て  
本とす。

地  
「日月は四州を照らすといへども。分きては唯正直  
の頭に宿り給ふ。

シテ  
「然れば二所宗廟の。御心を知らんと思はゞ。

地  
「正直を以て本とすべし。

「然るに大御神。地神の為めに皇孫を。蘆原の中つ  
國に。降し奉らんとて。三種の神宝を。自ら授  
け給ひしに。其三種にも取り分きて。八咫の鏡は  
殊になほ。御影を写しつゝ。御身を放ち給はず。  
其鏡の如くに。万境を写しながら。しかも一物を

貯へず。神牀を清めて。正直を授け給へり。され  
ば生きとし生けるもの。日月の恩徳に。預らざる  
はなき物を。是れ以て當宮の。御神徳にてあらざ  
るや。

シテ  
「然れば神代の昔より。

地  
「今人の世に至るまで。神徳は明らかに。垂仁天皇  
の御宇かとよ。下つ岩根に宮居して。皇大神とな  
り給ふ。是れ正に本覚の。和光に交じる塵の世を。  
守らん為めの御誓。仏も同じ御心の。自性真如の  
月読の。神とも示現し給へり。

「實に有難き神道の。く。曇らぬ御代を受けて知

る。人の心ぞ有難き。

二人 「一河の流れ汲みて知る。今日しもこゝに都人。君と神とは隔なき。御物語り申すなり。

地 「そもそも老人は誰なれば。わきて委しく白木綿の。

二人 「斯かる御代ぞと仰ぎ見る。

地 「天つ空音の。

二人 「時鳥。

地 「一声鳴くも折からに。神の告ぞと木綿四手の。田

長と見えつるが。我興玉の神よとて。御裳濯川の渡瀬なる。神が瀬を打ち渡りて。跡も波に入りにけり。跡白波に入りにけり。(中入)

ワキ歌  
「實に今とても神の代の。く。誓ひは尽きぬしる  
として。神と君との御恵み。誠なりけり有難や。

く。

後ジテ  
「君が代は尽きじとぞ思ふ神風や。御裳濯川の澄まん限は。守るべしく。百王守護の神明として。

和光普き皇の数。すめら世までも守りの神。興玉

の神とは我事なり。

地「や玉垣の。内外の宮居声満ちて。

シテ「月読の宮居照りまする。

地「潔き影や鏡の宮所。

シテ「空澄む雲も朝熊や。

地「汐干の石と顯はれしも。濟度方便の影な忘れそ。

く。千早振るなりゆだちの袖。

(神舞)

シテ「神風や。伊勢の浜荻折り敷きて。  
く。旅寐やすらんあらき浜辺に。  
シテ「清き渚の玉の数々。

地「光りも天照らす。  
シテ「天の岩戸の昔をうつす。  
地「榦葉の神歌。

シテ「千早の袖や御裳濯川の。

地「波の白和幣。

シテ  
「水の青和幣。」

地  
「取りぐさまぐの神遊び。鏡の宮居朝妻の汐時に。沖より見えて白波の。沖より見えて白波の。又立ち帰り二見の。浜松の千代の影ある。神と君こそ久しけれ。」

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第八輯」大和田建樹著